

4 自分で選んだ道

1972-1994年

文化会館から埼玉県立図書館に異動し、1980(昭和55)年には県立久喜図書館の館内奉仕部長にまでなった民子ですが、次第に体調を崩すようになり、58歳の時に退職を決心します。

退職後、師・木俣が亡くなり、「形成」存続のため、後輩の指導育成に尽力しました。こうした民子の短歌の業績が認められ、1992(平成4)年には紫綬褒章を受章します。

1993(平成5)年、「形成」はついに解散することになります。民子は後輩達のために新結社「波濤」を結成、雑誌「波濤」を創刊します。それから間もなくの1994(平成6)年1月5日、民子は心筋梗塞により大宮の自宅にて永眠しました。享年69。

その後、民子関係の資料約1万点が当時の大宮市に寄贈され、現在はさいたま市立大宮図書館で資料の整理・保管・展示を行っています。

波濤

民子が仲間に宛てた手紙によると、「波濤」という名前には「一人一人が大波、小波を立てられるように」という意味を込めているそうです。

忙しい準備の中で完成した、雑誌「波濤」の最終校正に目を通した民子は、「よく出来たじゃないの」と言って、仲間たちの労をねぎらいました。「波濤」創刊号は1993年12月25日に無事発行されましたが、その数日後、まるでその創刊を見届けるかのように民子は69歳で亡くなりました。

「波濤」は2024年3月現在で363号まで刊行され、今も民子の想いは受け継がれています。

参考文献 『私の短歌入門』山本友一/編 有斐閣 1977年

『大西民子集-現代短歌入門(自解100歌選)-』大西民子/著 牧羊社 1986年

『城南百年』協賛会記念誌編集部/編 盛岡市立城南小学校開校百周年記念事業協賛 1993年

『青みさす雪のあけぼの-大西民子の歌と人生-』原山喜文/編 さきたま出版 1995年

『回想の大西民子』北沢郁子/著 砂子屋書房 1997年

『白梅百年史 通史編』盛岡第二高等学校記念誌編集委員会/編 盛岡第二高等学校 1998年

『評伝大西民子』有本俱子/著 短歌新聞社 2000年

『まぼろしは見えなかった-大西民子随筆集-』大西民子/著 さいたま市立大宮図書館/編

さいたま市教育委員会 2007年

『女学校と女学生』稲垣恭子/著 中央公論新社 2007年

『無告のうた 歌人・大西民子の生涯』川村香平/著 角川学芸出版 2009年

『大西民子の足跡』原山喜文/著 沖積舎 2016年

『歌と随筆』第4巻第23号 蒼明社 1949年

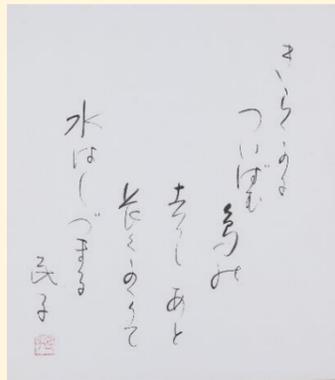


▲写真「大宮の自宅にて、50代後半ごろの民子」
撮影年不明

盛岡に建つ民子の歌碑



▲写真 (No.10)
2023年撮影



自筆色紙(N.9)
「きららかに
ついで鳥の
去りしあと
長くかかると
水はしづまる」

若い頃に川で見かけた光景でしょうか。きらきらと輝く水辺で餌をついばんでいた鳥が飛び立ったあと、水面の波紋はしばらくしてようやく静まりました。この歌は、2009年に盛岡市に建てられた歌碑に刻まれました。碑は、市内を流れる中津川の流れを望む、上の橋のたもとにあります。



2024年4月1日発行
さいたま市立大宮図書館
埼玉県さいたま市
大宮区吉敷町1-124-1
電話 048-643-3701
FAX 048-648-8460

生誕100周年記念展示

歌人

大西民子

—故郷・盛岡を想う—

会期：2024年4月1日(月)～5月30日(木)

会場：岩手県立図書館 吹き抜けスペース

1 短歌との出会い

1924-1944年



▲写真「民子が見た盛岡天満宮の石川啄木歌碑」2023年撮影
「病のごと 思郷のこころ湧く日なり
目にあおぞらの煙かなしも」

歌だけでなく、啄木の人生にも憧れた民子は、遠方の奈良女子高等師範学校(現・奈良女子大学)を目指し、文科第一部(国漢専攻)に見事合格します。在学中は、歌人・前川佐美雄の指導を受け、手作りの歌集を作っていました。ひたむきに勉強に励みながらも、歌を詠み、大好きな音楽や寺院めぐりに夢中になった日々は、民子のもっとも幸せな時期でした。



▲校友誌「白梅」第27号(参考資料)
岩手県立盛岡第二高等学校所蔵
民子の作品が掲載されています。



▲写真「盛岡高等女学校時代の民子」
1937-1941年頃撮影



▲写真「盛岡高等女学校旧校舎」
撮影年不明
岩手県立盛岡第二高等学校提供
民子が通っていた時の校舎。



▲写真「奈良女子高等師範学校時代(後列中央が民子)」
1941-1944年頃撮影



▲写真「釜石での教員時代」 1945年頃撮影
生徒とともに写った写真、下段中央着物の女性が民子。
教員をしていたのは1944年9月から1949年2月(闘病期間
も含め)と短い期間でしたが、埼玉に来てからも、しばしば教え
子たちが民子を訪ねに来ており、慕われていた教員であった
ことが伺えます。

民子と戦争

民子が教員として赴任した釜石には製鉄所があったため、戦時中標的にされ、1945年7月14日、8月9日と2回に渡り艦砲射撃を受けました。焼野原になった釜石から疎開しようと、8月11日、一年生女学生150人は民子を含めた3人の教員に引率されて、約40km離れた遠野へ徒歩で向います。

道中、しばしば空襲を受けましたが、奇跡的に全員無事にたどり着くことができました。のちに民子は、この時のことを歌に詠んでいます。

「遠き夜の記憶のなかに立ちそそる
照明弾の下の檜の木」



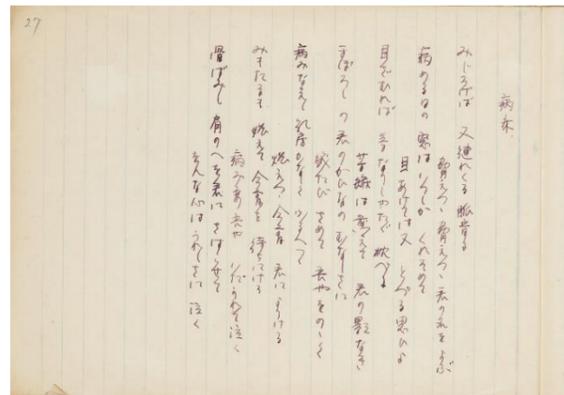
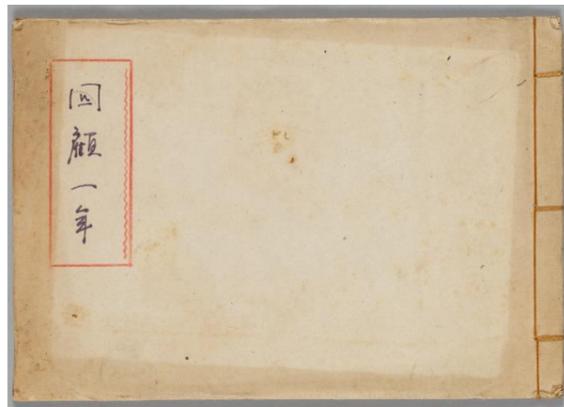
◀ 歌集『冬暦』(No.11)
木俣修 著
1948年刊行
八雲書店

後に民子の師となる、歌人・木俣修の歌集です。戦後まもないころ、我が子を死産し心の傷を抱えて過ごしていた民子は、この歌集を読んで大きな感銘を受けました。『冬暦』について民子は、「失意のどん底のまっくらがりの中でめぐりあった光体のようなものであった」と言っています。

2 教員生活と結婚

1944-1949年

戦争が激しくなった1944(昭和19)年9月、卒業を半年早く繰り上げた民子は、釜石高等女学校(現・釜石高等学校)の教員となり、生徒とともに疎開先の遠野で終戦を迎えます。戦後、釜石市の教員仲間でおおにしひろしで小説家を目指していた大西博と出会った民子は、1947(昭和22)年に家族の反対を押し切って結婚しました。翌年には子どもを授かりますが、死産してしまい、自身も病により半年間病床に伏すことになりました。



▲手作り歌集『回顧一年』 1948年5月21日作
結婚から子どもの死産、闘病生活までの1年を歌に詠んだもの。この「回顧一年」を雑誌「歌と随筆」へ投稿したところ、歌人・木俣修によって特別作品に選ばれ、「歌と随筆」第4巻第23号(1949年6月刊行)に掲載されました。

その後、仕事に復帰した民子でしたが、我が子を亡くした辛い日々を過ごしていました。ある日、釜石市の書店で見つけた歌人・木俣修の歌集『冬暦』を読み、民子は大きな感銘を受け、本格的に歌の勉強をしたいと思うようになります。そして、多くの文学者が活動する東京へ行きたいと博に上京を促しました。

3 大宮への移住

1949-1972年

1949(昭和24)年、民子は埼玉県大宮市に引っ越し、埼玉県立文化会館で働くことになりました。大宮に来てまもなく、木俣修に入門を認めてもらった民子は、短歌雑誌「形成」の創刊にも参加します。一方、私生活では夫との折り合いが悪くなり、別居状態となりました。

1956(昭和31)年、民子は初めての歌集『まぼろしの椅子』を刊行しました。生活の苦悩や不安などの感情をありのままに表したこの歌集は、広く共感をよび、歌人としての地位を確かなものとします。



▲写真「木俣修(左)と民子(右)」 撮影年不明
弟子入りして間もなく、木俣から「歌は生涯のマラソン、敵は自分自身」と教えられた民子。この教えは生涯、民子の生き方を支えました。

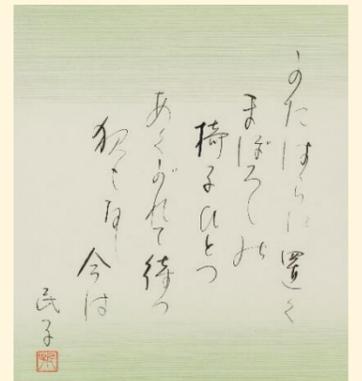
初めての歌集

第1歌集『まぼろしの椅子』は、家に帰らない夫・博と、その帰りを待つ自身の姿を歌に詠み、刷った300部がたちまち品切れになるなど評判を呼びました。『まぼろしの椅子』という題名は、木俣が付けてくれました。



▶ 歌集『まぼろしの椅子』
大西民子 著
1956年刊行 新典書房

▶ 自筆色紙(N.12)
「かたはらに置く
まぼろしの
椅子ひとつ
あくがれて待つ
夜もなし今は」



『まぼろしの椅子』という歌集名の由来となった一首です。夫の博は大宮に来てから急に人が変わってしまい、だんだん家に帰らなくなってしまいます。かたわらに座るべき夫を、毎晩はかなく待ち続ける民子でしたが……。

別居から約10年を経て、民子は、「大西」という姓をペンネームとして使用することを条件に離婚しました。この間、岩手を出て埼玉県岩槻市で共に暮らしていた母を亡くした民子は、最愛の妹も失い、天涯孤独の身となりました。

◀ 自筆短冊(No.15)
「遠き雲の地図を探さむこの町を
のがれむといふ妹のため」

あの遠い雲を描いた地図を探そう、この街から逃れたいと言う妹のために、と大宮で一緒に暮らしていた妹・佐代子を想い詠んだ歌です。来客の多い民子は、休みの日もゆっくり過ごせませんでした。内向的だった佐代子は、「人の来ない所へ引っ越ししょうよ」と言っていたそうです。



▲写真「妹・佐代子(左)と民子(右)」 撮影年不明
44歳の時に大宮市内の建売住宅を購入した民子は、佐代子と支え合って暮らしていました。民子にとって、最後の家族である佐代子は精神的な支えでしたが、1972年の6月の夜、佐代子は心臓麻痺を起こし亡くなります。予期せぬ突然の別れに、民子はその死をなかなか受け入れることができませんでした。